

麗しの島

近代台湾と日本①

大航海時代のポルトガル人が「イーリヤ・フォルモサ(美麗島)」とたたえた南国の島、台湾。1895年からほぼ半世紀、この島と日本は深いかわりを持ち、多くの画家が海を越えて行き来した。

美の美

朝だというのに、町にはすでに強い日差しが降りそそぐ。「嘉義の町並み」は、南国らしい光と影のコントラストがまぶしい絵である。

熱帯原産の鳳凰樹。右脇に見える麦わら帽に白シャツの男は、いまたばこに火をつけたと云った。

町で一番高いコンクリート3階建ての百貨店前を、日傘を差した婦人が人力車で走り去っていく。腰をかかめた老人が日陰でほっと一息つき、「新高写真館」のウィンドーをのぞいている。画面の右側で青々と葉を茂らせるのは

陳澄波(1895~1947年)は台湾で西洋画の第1世代に位置づけられる画家である。幕末・明治に「足はやく」「洋画」を習得した日本から西洋の美術を学び、台湾での普及と発展に尽くした。日本や中国に暮らし、1933年に帰郷した後を描いた故郷・嘉

義の風景は、代表作に挙げられる。

「父は本当に忙しかった。家にいたのは1年のうち3カ月くらい」。3月中旬、今も嘉義に暮らす陳の長男、陳重光さんに会うことができた。今年で89歳。父親と同じく日本統治下で学校教育を受け、流ちょうな日本語を話す。24年から上野の東京美術学校(現・東京芸術大学) 図画師範科、研究科に5年留学し、台湾画壇のリーダーと目される存在だった。学生時代、日本の帝展(帝國美術院展覧会)に台湾人として初入選。帝展をモデルに創設された台展(台湾美術展覧会)では、ある時期から鑑査なしの出品が認められ

るほどの実力を誇っていた。

「親子でゆっくり話す時間はありません」と重光さんは当時を振り返る。仲間と台陽美術協会などの画会を組織し、展覧会の準備や制作で各地を飛び回る毎日。いったん帰宅すれば、自作を手にした画家志望の若者がひっきりなしにやってくる。わずかな時間を見つけて自転車にカンバスを積み、近所の公園や噴水池に出かける父に付き添う時間が、重光少年の楽しみだった。

「外で描いたのはアトリエがなかったから。父は入ってくるお金をすべて絵のことに費やしてしまいましたから、生活は大変でした」と重光さん。陳はじつになるまで長屋のような小さな家に暮らした。

重光さんと長男の陳立梧さんに連れられて嘉義の町を歩いた。市内の各所に陳が制作した場所に40枚ものパネルが置いてある。バーコードにスマートフォン

オン(スマホ)をかざすと、絵について詳細な解説が読み取れる仕組みだ。現在は甘味屋になっている陳の旧居から出発し、町のランドマークである噴水池、日本が神社を建造した嘉義公園など、ほとんどの場所を歩いて回ることもできる。

台湾に舞い戻った陳は、以前にも増して身近な景色に目を向けるようになった。台湾の美術史家、蕭瓊瑞さんは「陳澄波の絵は『風景画』というよりも『風土画』と呼ぶのがふさわしい」と指摘する。たとえば、町の噴水池を季節ごとに、東西南北の4方向から絵にしたのにも理由があるという。「目に見えるものをただ写したのではなく、台湾の自然、伝統、そして現在を一枚の絵で正確に伝えようとしたのです」と蕭さん。「嘉義の町並み」や左ページの「嘉義の中心部」を例にとりて説明してくれた。

日本時代の嘉義は阿里山のヒノキでうるおう製材の町。内地の富士山より高いことから「新高山」と名付けられた玉山にも近い。香り高い茶の産地、台湾最高峰の名勝への玄関口でもあったのだ。町の商店はしばしば「新高」を屋号にした。登山者が記念写真の撮影に立ち寄った「新高写真館」もそう。新高山との近い関係を物語る。

噴水の周りに店や屋台が並び、人々が散策する「嘉義の中心部」を見てみよう。ラムネを並べた右側の屋台近くを少女と連れだって歩く老女は、腰まで隠れる上着とスカート姿。台湾伝統の服を着て、中国清時代のなごりであるてん足をしている。画面の左手、肉まんじゅうを売る屋台の向かいには、20年に製造販売が始まった「高砂ヒール」の看板がかかる店がある。嘉義には木材運搬専用の列車が開通し、電氣や下水道の整備も進んだ。モダンさを誇るかのように、絵には何本もの電柱がそびえ立つ。



(1934年、油彩、カンバス、91×116.5cm、個人蔵)

息子の重光さんによると、陳は赤と緑の階調をとりわけ熱心に研究したという。緑は熱帯、亜熱帯の木々、赤は台湾の赤みをおびた土の色でもある



水彩画家の石川欽一郎からの手紙

台湾で長く美術教師を務めた石川と出会い、陳は西洋美術に初めて触れた。父のように敬愛した恩師の石川からは何度となく温かい励ましの手紙を受け取っている。

洋画をもたらした先駆者 南国の風土とりこむ画風



「自画像」

(1930年、油彩、カンバス、41×31・5㌢、個人蔵)
大胆な色使いと筆のタッチもこの画家の持ち味。大正から昭和にかけて日本の画家を魅了したフランスのフォービスム(野獣派)の影響もうかがえる



陳澄波「嘉義の中心部」



(1934年、油彩、カンバス、91×117㌢、個人蔵)
噴水の左手の商店には「高砂ビール」の看板がかかっている。人力車が並び、ラムネ売りの屋台などが立つ風景は日本人にとってもどこか懐かしい
写真左上は拡大図。噴水左手前に立つ2人の人物はパラルルを持つ女性と少女だろうか。数色の絵の具をつけた筆で一筆書きしているのがわかる

下)を書き送っている。
「フランスは今為替が高いから当分行くのはバカらしいでしょう。東洋美術(支那や印度)を研究されるようお勧めします。支那の古画は我々の好考でフランスよりも有益です」(34年8月15日付)
妻と2人の娘、留学中に嘉義で生まれた重光さんと呼び寄せて30年夏、家族水入らずの上海生活が始まった。毎朝、毎夕、そろって食卓を囲むことができたのは、わずか2年足らずのことだ。「私の家族」は陳が生涯で1枚だけ描いた家族の肖像である。
夫の留学を内職で支えたのは、裁縫上手の妻。この絵では、まるで扇の要のような位置に布地を手にして座っている。母親の隣でコマ遊びをしているのが3、4歳の重光さんで、右端の長女は教本をを広げ、中国語の特訓中だ。パレットを持つ父親のかたわら、赤い手袋をはめた手で絵に触れているのが次女。父に画才を見いだされ、後に19歳で台湾の府展(台湾総督府美術展覧会)に入選を果たす自慢の娘だ。
石川が見抜いたとおり、上海時代は陳の画業にある転機をもたらした。幼少時には漢学の教師だった父の私塾で手ほどきを受け、東京美術学校では西洋画だけにとどまらず、書や水墨画、南画などを広く学んだ。中国人画家とも深く交流した陳は「台湾、中国、日本をよく知り、油彩という西洋のテクニックで東洋の精神を表現した」と蕭さんは評価する。カンバス上で色を塗り重ねる代わりに、筆に数色の絵の具をとって一筆書きする。階調のちがう茶色一色で風景画を描く。書や水墨画

45年の敗戦で日本は植民地を放棄し、台湾を去った。陳が嘉義市の議会選挙に担ぎ出されて当選を果たしたのは翌年のことである。「家族はみんな反対。でも友人知人がたくさんやってきて、断ることができなかった」と重光さんは言う。新たな施政者である中国国民党への失望がやがて台湾全土に広がり、47年、軍が住民を激しく弾圧した「二・二八事件」が勃発。当局との交渉を模索した陳は反乱分子としてとらえられ、裁判もないまま、嘉義駅前広場で銃殺刑となる。
事件後の陳一家は長い沈黙を強いられた。戒厳令下はつねに監視下に置かれ、家捜しの対象にもなったという。孫の立相さんには、子供時代のこんな記憶がある。旧正月にあたる春節前になると屋根裏に上がり、紙がまった柳行李や丸めたカンバスのホコリを筆でひとつひとつ払うよう祖母に命じられた。祖父の名前は聞いたことがなく、と「ズレ」る雨漏りでカビが生え、虫食いの穴ができたそれらが何であるかも知るされなかった。重光さんがつぶやく、「戸板に乗せた父の遺体が帰宅すると、どこから出た強い意志なのか、母は写真屋に頼んで写真を撮らせまし



「私の家族」

(1931年、油彩、カンバス、91×116・5㌢、個人蔵)
1930年代初めに出版された芸術選集の一冊「プロレタリア絵画論」が卓上に見える。東京美術学校の卒業展覧会でも出品作の3分の1が影響を受けていたといわれるほど、プロレタリア絵画は当時の若者を引きつけた

た。そのガラス乾板をはじめ父に関するものすべてを30年以上も隠し通したのは母なんです」
刑務所内で走り書きした遺書に至るまでの資料およそ5千点。スケッチや絵画類1万1千枚。これらをデータベース化する大プロジェクトが進行中だ。計画を率いる中央研究院台湾史研究所所長の謝國興さんは「一家族のあゆみから台湾の近代史が見える。公文書とはちがう貴重な記録だ」と熱を込める。「新しい台湾芸術の創造を目指す第1世代の知識人」と陳を位置づけるのは台北市立美術館シニア・キュレーター林育淳さん。台湾の美術とは何かを真剣に考え抜いた日本時代の台湾人画家たちの発掘がいま、こうした研究者の手で急ピッチで進む。

文・窪田直子

「美の巨人たち」テレビ東京系
列で、毎週土曜午後10時から放送
※放送局の都合により変更あり

